

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390102055		
法人名	医療法人よつば会		
事業所名	グループホームメディフル藤田東館		
所在地	岡山市南区藤田1134-3		
自己評価作成日	令和3年9月30日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://pref.okayama.jp/page/detail-7669.html
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利法人 津高生活支援センター		
所在地	岡山市北区松尾209-1		
訪問調査日	令和4年1月17日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症の進行や身体機能の低下により、できなくなることも増えてきますが、一人ひとりの「できる力」を見逃さず、その力を大切にすることが、本人らしさや自立支援に繋がると目指しています。しかし、日々の中では、つい「してあげる」支援に傾きがちで、本人のできる力を奪ってしまっている面もあることを、職員で話し合うようにしています。本人の力を見極めるアセスメント力の向上が大きな課題ですが、話し合える関係性はチームの大きな長所です。昨年度に引き続き、非常災害対策に力を入れて、繰り返しの訓練や、勉強会を継続していますが、なかなか実践力には結びつかないのが実情で、これも工夫が必要に思っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念に基本方針をかかげ「地域に安心して、スタッフに安心して心穏やかな生活を送る事ができる」グループホームを目指しています。日常のあらゆる場面で入居者一人ひとりの自立・個性を大切に支援に取り組み、運営推進会議で外部との連携を図り、市、家族、地域との協力関係を大切にしながらその人らしい暮らしの継続に努めています。入居者の屈託のない言動とリーダー、職員の明るい表情から入居者、職員が共同生活の実践に取り組んでいる様子が窺えます。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ミーティングやカンファレンス、日々のケアの中でも利用者本位の支援ができていないか、自立支援に繋がるケアになっているかチーム内で確認し共有できている。しかし、つい「してあげる」支援に傾くことも多く、理念に沿ったケアに繋がっていない場面もある。	地域密着型サービスの意義をふまえ、基本方針を理念として、一人ひとりに寄り添った支援に努め、安全への支援を優先するあまり、支え合う関係が疎かになっていないか等振り返る事を大切にしている様子が窺えます。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入しているが、コロナ禍の中、町内活動も自粛が続いているため、情報共有のみとなっている。そのため、職員の意識や入居者の認知度が低下していることが課題である。	コロナ禍で自粛が続く中、地域と共に暮らす事が実践できておらず、運営推進会議(書面)でのアンケートなど工夫してつながりに努めています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議を通して、認知症や防災対策など地域でも関心の高いテーマを取り上げたり、グループホームの活動状況を定期的に報告し、理解を得ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度、書面での開催を継続している。ホームからの報告(開催)→委員からの意見(アンケートや電話)→ホームで検討報告(議事録)の流れで行っている。多くの意見、感想をいただいていることは評価できる。対面開催ができないことで透明性の確保は特に意識している。	運営推進会議は地域、入居者の家族、行政などが参加して、「グループホームが地域の一員として、透明性を持って運営に当たる」を目的とし、運営推進会議を活かした取り組みに、真摯に向き合っている様子が窺えます。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	管理者が窓口となって行っている。運営上の疑問や方向性の相談、制度の確認など密に行っている。運営推進会議は書面であるが、情報交換等行えている。	事業所の情報は運営推進会議の報告を中心に行なっているが、制度的な理解については気軽に聞き、協力関係を築くよう努めています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年4回身体拘束廃止検討会を開催し、身体拘束にあたる行為や、そのリスクについて学ぶとともに、気づかない身体拘束がないか確認している。言葉による制止や自分たちの都合で玄関の定刻施錠していることを気に留めなくなっていること等が、それにあたる。	特に帰宅願望の方や、玄関の出入には行為の理解と安全確保を踏まえて、身体拘束にならないよう入居者の行動(意図)を大切にしたい支援に努めています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束廃止検討会とあわせて開催している。特にグレーゾーン(不適切ケア)について力を入れている。身体拘束同様自分では気づき難いためヒヤリハットを活用しているが、互いに声を掛け合うことは十分にできていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	繰り返し学びの場を設けることにより、利用者の尊厳を守ることを意識してケアにあたっている。制度の内容についても、内部研修を通して理解を深めていけるように努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時の説明は、文書に沿って管理者が行っている。また、必ず同席職員を設け、複数で対応することで、聴いている家族の様子を確認、不安や疑問に対応できるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	言いづらい心情を理解した上で、答えやすい質問を投げかけたり、アンケート形式にしたりしている。伝えてくださった意見、要望は記録に残すとともに職員間で共有し対応できる方法がないか検討している。	コロナ禍での運営推進会議は、意見交換としてアンケート形式を取り、入居者家族やその他の参加者の意見をFAXや返信封筒を同封して収集し、それらを運営に反映させるよう取り組んでいます。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の中で確認し合ったり、3か月に一度の管理者との面談時に、勤務体制や業務内容、その他の疑問や不安な点を話し合うことで、運営の反映に繋げている。	リーダー、職員が話し易い関係にあり、日常的に職員の気付きや提案などを聞き、また、管理者は要望など聞く機会を設け、運営に反映している様子が窺えます。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員それぞれの事情や家庭環境に考慮した勤務体制が整っており、その変更にも柔軟に対応している。人手不足から、残業が常態化している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	キャリアパスを取り入れており、各職員の目標に合わせた取り組み方を具体的に設けることで実践に繋げている。入職時の研修はリーダーが主体となって行っているが、職員全体でも取り組んでいる。コロナ禍において、外部研修への参加が少なかった。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は、継続的に研修を通じた外部との繋がりを持っているが、職員は、外部研修機会を持たず、法人内での会議が唯一の情報交換の場となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居を理解している方や納得している方は殆どないのが現実であり、入居後の不安、孤独感、混乱に繋がっている。事前面接の際に、本人の「知り合いになる」ようなつもりで言葉や雰囲気作りに配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	それまでの介護負担に寄り添い、入居を悩まれた過程、入居に対する自責の念を持ち合わせていることを十分に理解し、共感できるようにしている。また、どのような事でも話していただけるように誠意を持って対応している。特に入居直後は、こまめに連絡して安心していただけるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の状況を十分に理解した上で、グループホームの入居が適切であるかや緊急性も踏まえて見極めるようにしている。本人や家族だけでなく、これまで支援に関わっている事業所からも情報を得ている。また、他のサービスが適切である場合には、そのサービスについての説明を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人がどうしたいかを大切に、安易に支援する側、される側にならないように気を付けているが、つい「してあげる」に傾きがちな面もある。生活全般において、一緒に行うことを大切にする中で、自然と助け合ったり気に掛ける関係ができていく面もある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍に於いて、家族面会が制限されている期間が長く、本人をともに支えることの共有ができにくくなってきた。本人の声や姿を届ける工夫を重ねているが、会えないことがより足を遠のかせてしまう懸念もある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の馴染みのある場所や知人を忘れないように、話題づくりとしては取り組んでいるが、関係を継続することの支援は十分にできていない。ただ、入居によって新たな関係性も生まれてくるので、それを大切にしていくことも重要と思っている。	初期に築く入居者、家族から得た情報を大切にし、また、ホームの生活で得た関係も混えながら関係継続を築き、コロナ禍でも出来る支援に努めています。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	互いを意識し合い、気に掛ける関係性が保たれている。お互いが気持ち良く過ごせるように、相性や性格、その時の状況に合わせて、きっかけを作ったり、環境設定に配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	殆どは、看取り(死亡)による契約終了のため、最後のご挨拶、語り合いの場で終了することが多い。ただ、その後身内の入居申込に繋がったケースもあった。転居や入院による契約終了時は、その後の経過を確認し、相談を受けられることを伝えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の中や行動から把握できるように努めているが、言い合える関係性への未達、遠慮、認知症の進行などから十分に思いを発信できにくい方も居る。言葉で表すことが難しい方は、表情や仕草などから汲み取り、その思いを理解できるように努めている。	一人ひとりの思いや暮らし方に関して、「出来る・出来ない」ではなく、「好き」のどこの部分を継続支援できるのかを見極め、本人本位に検討するよう努めている様子が窺えます。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族との会話や聞き取りの中から、把握するように努めている。特に、習慣としていたことは続けられるように、職員全体で取り組むようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の様子や変化、個々の力を観察し、その内容を詳しく記録に残したり、申し送りだけでなく、その都度話し合い確認し合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月、振り返りシートを活用し、職員全体で振り返りを行った上で、課題やケアの方法を検討している。本人の思いは会話など関わりの中から、家族へはカンファレンス前に意向を確認しており、計画に反映している。	機能低下を遅らせ、自分らしい生活の継続を支援していくうえで、「やりすぎ支援」にならないよう、医師、看護師などの意見も取り入れながら、現状に即した介護計画を作成するよう努めています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録を丁寧に残すことを意識しているが、次に繋がるための記録としてはまだまだ不足も感じられる。今年度9月に紙媒体の記録からデータ管理に移行され、その混乱も相まって、記録への課題は多い。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	通院は、かかりつけ医だけでなく柔軟に対応できている。外出自体の自粛のため、どこにも出かけられていない現状もあるが、以前からもグループホーム以外のサービス利用は殆どない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣のスーパーや商店、米屋、花屋、理容(訪問散髪)、町内会、婦人会、保育園など地域の資源を大切にしているが、現在は利用者が出向く機会を自粛している。すでに交流を経験したことのない職員も増え、再開時に柔軟に対応できるかは課題と思われる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居以前のかかりつけ医の継続、または連携医への変更を選択できる。専門医のかかりつけ医がない場合は、連携医より紹介をおこなっている。受診の対応は家族または職員で行い、必要に応じて、家族に同行することもある。	受診は、本人及び家族などの希望を大切にし、適切な医療を受けられるよう家族の協力と共に、適切な受診に努めています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	連携医の看護師が定期的に訪問し、利用者の健康管理を行っている。その他、日々連絡や相談ができる体制が整っており、利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には情報提供を行い、入院中もこまめに状態確認を行っている。早期退院に向けて調整を行い、家族へもこまめに連絡を取っている。入院先が面会可能な場合は出向いて、本人の様子を確認することもある。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時だけでなく、入居後も年に一度のペースで考えていただく機会を設けている。しかし、なかなか考えられない、まだ先のことと思われるご家族も多いので、普段の会話から心情を読み取り、共有していくよう気を付けている。	本人、家族の希望による終末期を支援しています。コロナ禍でいろいろな制限があるものの本人・家族に悔いが残らないよう配慮しながら、医者や看護師と共にチームで支援に取り組んでいる様子が窺えます。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時、事故発生時、感染症発生時の各対応マニュアルがあり、定期的に確認しているが、その実践力は高いとは言えず課題である。AEDの設置がグループホーム内であるが、定期的に使用可能な状態かどうか確認することや使用方法の把握は十分にできていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害マニュアルが整備されており、火災(昼夜)、水害などの訓練を行っている。火災については、消防署立会いのもと訓練を行い、助言をもらっている。少しずつではあるが、実践へ繋がっている場面もある。	火災だけではなく、天災害にも着目し訓練を重ねています。西日本豪雨の折には避難も経験し、それを糧に職員がその方法を身につけ、実践に繋げている様子が窺えます。	想定外災害が起こる昨今、これからも引き続き災害対策に取り組み、職員だけでなく地域との協力体制の強化を図られることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	各職員が意識して取り組んでいるが、申し送り時やその他でもプライバシーに関わる(排泄や食事量など)確認を大きな声でし合うことがあり、その都度注意を互いに促している。申し送りは、個人情報と話される場なので、利用者の見守り体制を確認しながらも場所や向きなどにも注意している。	馴れ合いにならない範囲で、親しみを持って入居者が受け入れやすい呼び方で接するなど、一人ひとりの人格を尊重し対応するよう努めています。	これからも自然体の中で、気遣いを大切に、プライバシーを尊重した対応に取り組んでいかれることを期待します。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々に合わせた選択肢を設けることへの意識が不足している。また、職員が先回りして支援してしまうことで、本人の自己決定に繋げていくことが出来ていない場面がある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースやタイミングに合わせながら、声掛けや介助をするようにしているが、やむを得ず職員の都合になることも。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々の希望に沿った支援に努めている。朝の整容や身だしなみに力を入れ、気持ち良く一日がスタートできるように意識している。汚れた衣類を、その都度着替えることはできているが、しわやほつれに対しては意識が低い。爪切りや髭剃りも不足している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	畑の野菜やスーパーでの購入も、旬の食材を取り入れるようにしている。果物は目の前で切り分けるなど、見た目でも楽しめるように工夫している。メニューに合わせて、ノンアルコールビールを飲む方も居る。調理や盛り付け、後片付けなど、個々の能力に合わせて一緒に行っている。	法人内の管理栄養士の献立表を基に、職員が買物し(コロナ禍は宅配を増やし)、季節の野菜を活用して入居者一人ひとりの嚙下状態に合わせて、食欲をそそる様な工夫など食事を楽しめるよう努めています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事、水分の摂取量や内容について、チェックし、一日の総摂取量を把握するようにしている。不足があれば、好きな物へ変更したり、合間で間食を摂るなどし、確保に努めている。水分量の少ない方には、好みの物や夜間にも提供をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアはトイレの後、居室に戻った時など、個々に合ったタイミングで行うようにしている。また、毎月提携の歯科クリニックより、助言や指導を受けながら、ケア目標を立て取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のリズムやパターンを把握し、トイレの声掛けや誘導を行っている。しかし、失敗の減少に繋がるには至っておらず、もう少しアセスメントが必要と思われる。	自立度からその日の体調、食事、水分の摂取量など様子を観ながら本人の意志も含め、プライバシーを大切にされた排泄支援に取り組んでいます。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	自然排便に繋げるため、乳製品や寒天を日常的に取り入れたり、定刻にトイレに座ることを促したりしている。しかし、摂取量に対し活動量が不足しており、内服に頼る方が多いのが現状である。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	日中だけでなく夜間入浴も積極的に行っている。入りたいタイミングや入りやすいタイミングを大切にしているが、職員の都合となる場合もある。ゆず湯や菖蒲湯など取り入れたり、一対一の会話を楽しむ機会とし大切にしている。	入浴は楽しく・気持ちよさを第一と考え（清潔保持は別の方法も考えられる）、一人ひとりの希望に添った入浴に努め以前の生活習慣による、寝る前の入浴も尊重し、実践されており個々に添った支援に努めています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々に合わせた時間、衣類、寝具、室温、明かりなど、環境設定に配慮している。睡眠状況により起床時間を遅らせたり、個々の状態に合わせた休息の確保ができています。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	確実な内服（誤薬防止）への取り組みばかりとなり、内容や変更の根拠などの理解は不足している。薬剤師による居宅療養管理指導をもう少し活用することが必要と思われる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人のできること、好きなこと、興味があることを見つけ、職員と一緒にいたり、継続して行えるよう配慮することで役割や楽しみごとに繋がるようにしている。同じ作業を続けることで、機能低下防止にも繋げていきたい。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出自粛から2年が経過した。現在は、隣の館までの往復や近隣の散歩程度にとどまっている。ドライブをもっと取り入れたいと思う。	コロナ禍以前は、入居者と一緒に行物をしたり、地域近辺を日常的に散歩していました。コロナ禍になってからは外気浴や気分転換になる程度の、入居者の希望に添った外出支援に努めています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の了解のもと、大半の方が財布を持っているが、現在は外出や訪問販売を控えており、支援が不足している。館内で使うことの支援への工夫もできていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの電話を取り次ぎ会話したり、ビデオ通話を活用し、直接顔を見て会話する機会を設けているが、一部の方に限られている。また、面会の一部解除によって、通話の支援が減っている。毎月の様子を伝える手紙を写真に切り替えて、より様子がわかるようにした。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節を感じられる草花を飾ったり、新聞や雑誌など日常生活を感じられるものが手に取れるよう、環境設定に配慮している。視覚だけでなく、オープンキッチンからの調理の音や匂いなども心地良いものとなっている。	メディフル本館の経験値を活かし、風呂場は寒さ対策のため狭くしたり、洗濯室と分けたり、床暖房を設置しています。食卓(食堂と居間を分けている)のすぐそばに長椅子や雑誌ラックもあり、デッキにも自由に行き来でき、閉塞感のない共用空間づくりが感じられます。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ダイニングとリビングが分かれており、それぞれが過ごしたい場所で過ごせるようにしているが、自ら選択することは難しい方も居るため、その都度確認したり、同じ場所に留まらず、見える景色が変わるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していた物、家族が新しく買い揃えた物などそれぞれであるが、できるだけ馴染みのある物に囲まれて生活できるように努めている。また、単に置いているだけでなく、活用できるようにしていきたい。	クローゼットと洗面台が各部屋にあり、それぞれの部屋に個性を感じさせ、安全面を配慮した居心地良く過ごせる工夫が窺えます。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーや手すりなどの設備だけでなく、自分の力を活かして動けることを支えるための家具の配置や、変更もできている。福祉用具の活用は不足している。		